

アクティブな学びを デザインする

4つの授業をめぐる対話

何百人の学生に対しても、“一人”に向けて話すべし

学生参加型講義のための授業デザイン

聴きたい授業を自分で作る

小さな成長を毎回体験させる

立教大学 | 大学教育開発・支援センター

アクティブな学びを デザインする

4つの授業をめぐる対話

はじめに

立教大学には、数多くの素晴らしい授業実践の蓄積があります。一方、新任教員の方、新しいタイプの授業に取り組もうとしている方、大人数授業など難しさを抱えて模索をしている方など、授業のためのヒントを求めている教員も多いと思われます。

大学教育開発・支援センターでは、特徴ある授業として推薦していただいた授業を見学し、授業後に担当教員と見学者が意見交換を行うFDワークショップ「授業見学」シリーズを企画し、2009年度に

I. 「何百人の学生に対しても、“一人”に向けて話すべし」

山口 義行 教授（経済学部）

II. 「学生参加型講義のための授業デザイン」

早川 吉尚 教授・原田 久 教授（法学部）

III. 「聴きたい授業を自分で作る」

豊田 由貴夫 教授（観光学部）

IV. 「小さな成長を毎回体験させる」

小澤 康裕 准教授（経済学部）

という4回の「授業見学」を開催しました。本書は、この意見交換会の記録に基づいて編集されています。授業準備の苦勞、大人数授業で学生をいかに集中させるのか、学生をディスカッションに参加させるやり方、コメントシートの評価法など、授業を見学して気が付いたさまざまな問題について意見交換がなされています。見学させていただ

いた4つの授業は、それぞれに異なるタイプです。各授業のプロフィールを参考にして読んでいただければ、読者の皆さんの問題意識に応じた授業改善のヒントが必ず得られるでしょう。

最近、授業改善のためのティップス集はいろいろと出版されています。当センターでも、2006年に授業評価アンケートの結果と教員による所見に基づいて「RIKKYO授業ハンドブック」をまとめています。しかし、こうしたティップスも実際の授業の流れの中においてみないと、その有効性もなかなか腑に落ちるところまでいきません。本書では、授業を見た上での質疑応答の雰囲気をもできるだけ生かす形で再構成し、生きたティップス集となるように努力しました。それが「4つの授業をめぐる対話」と副題をつけた所以です。

授業を公開し、意見交換会でも貴重なノウハウを惜しみなく語ってくださった山口義行・早川吉尚・原田久・豊田由貴夫・小澤康裕先生に心より感謝をいたします。また、FDワークショップに出席し、活発な意見交換を行っていただいたすべての参加者の皆さんにもお礼申し上げます。本書が「授業見学」当日に参加できなかった方々にとっても、有益なものとなることを願っています。

大学教育開発・支援センター長／理学部長
佐藤 文広

はじめに	
センター長 佐藤 文広	2

本書の目的・ページ構成	6
-------------------	---

I 何百人の学生に対しても、“一人”に向けて話すべし

2009.04.18 Sat.

山口 義行 教授（経済学部）	7
----------------------	---

II 学生参加型講義のための授業デザイン

2009.10.21 Wed.

早川 吉尚 教授・原田 久 教授（法学部）	13
-----------------------------	----

III 聴きたい授業を自分で作る

2009.10.23 Fri.

豊田 由貴夫 教授（観光学部）	23
-----------------------	----

IV 小さな成長を毎回体験させる

2010.01.13 Wed.

小澤 康裕 准教授（経済学部）	35
-----------------------	----

☆参加者からひと言

日向野 幹也 教授（経営学部）	45
-----------------------	----

清水 絹代 教育講師（ランゲージ・センター）	47
------------------------------	----

参考文献・ブックガイド	49
-------------------	----

本書の目的

本書は、立教大学 大学教育開発・支援センターが2009年度に実施したFDワークショップ「授業見学」で行われた意見交換会のまとめをもとに再構成し、その知見と知恵を学内で広く共有することを目的としています。

ページ構成

1 授業内容 ▶ 本授業の紹介

2 見学日の授業 ▶ 見学日の授業の位置づけ

1 授業内容

本授業は、

- 学生が想像できる範囲の身近に起こっている出来事と専門的知識をいかにつなげるか
- 大人数の授業の中でいかにして一人一人の学生が「発言意図を持たせるか」といった点で多くのヒントを与えてくれる。

山口先生の授業は学外でも有名で、教壇上での主体的に見学にもくちもある。詳しくは、著書「聞かせる技術」(明石社・新社、2008)で「どうすれば相手は自分の話を聞いてくれるのか」について具体的な例に分かりやすく説明されている。

2 見学日の授業

見学日(2009/04/18 Sat.)は、2009年度前期「金融論1」の第1回目であった。山口先生の「授業は初回が肝心」との指摘から、この日を見学日にさせていただいた。

3 授業スケジュール (出典：2009年度 シラバスより抜粋)

授業の目標

金融の仕組みや金融制度の解明を通して、現代経済の構造や動向を理解する。金融論1では、特に基礎的な制度や理論の理解を目標とする。

授業の内容

金融を理解するにあたって不可欠な「信用」という概念を取り上げた後、銀行制度に関する仕組みや理論を、最後には中央銀行の役割や金融政策について講義する。

成績評価方法、基準

学期末筆記試験の結果と出席状況(含：コメント)で評価。前者が8割だが、割合は試験結果や出席態度などで変化する。欠席回数4回以上は0評価。

テキスト

山口義行「儲のための金融再生か」(ちくま新書)、山口義行「経済再生は「現場」から始まる」(中公新書)。なお、書き込み式の講義ノートとして山口・川崎・福岡「金融論講義ノート」(三書社)を使用。

参考文献

授業中に提示する。

授業計画

1. 銀行信用と信用創造……………「おカネは日銀がつくるもの」という誤解
2. 信用による貨幣代位とその限界……………銀行はなぜ少ない現金準備でやっていくのか
3. 預金形成の諸要素……………企業はなぜ預金をもたざるをえないのか
4. 銀行借入の諸要素……………企業が銀行借入をしたがる3つの理由
5. 銀行貸出と実体経済……………銀行は単に「貸借を供給する機関」ではない
6. 中央銀行の役割と金融政策……………「公定歩合の上げ下げ」こそ金融政策という誤解

4 対話

授業の工夫

授業運営について

Q 非常に大人数にも関わらず、学生が私語をなく集中して聞いていたのが印象的だった。もししたら、このように授業に関心を持っていただくことができるのか?

A 科目の意義を随所で伝えていくことが大事だろう。他にも、キーワードを言う前には「今からさっきの1次事なことを言うから」

意見交換会を振り返る
一人一人の学びを大切に

3 授業スケジュール ▶ 2009年度シラバスより

4 対話 ▶ 意見交換会のまとめ(再構成)



I 何百人の学生に対しても、 “一人”に向けて話すべし

山口 義行 教授（経済学部）

授業のプロフィール

授業名：金融論1 @池袋キャンパス

- 履修者数：500人程度【大規模授業】
- 履修区分：経済学部1年次選択科目
- 授業形式：講義型

2009.04.18 Sat.

1 授業内容

本授業は、

- 学生が想像できる範囲の身近に起こっている出来事と専門分野の情報をいかにつなげるか
 - 大人数の授業の中でいかにして一人一人の学生に当事者意識を持たせるか
- といった点で多くのヒントを与えてくれる。

山口先生の授業は学外でも有名で、教員が自主的に見学にくることもある。詳しくは、著書『聞かせる技術』（河出書房新社、2008）で「どうすれば相手は自分の話を聞いてくれるのか」について具体例的に分かりやすく説明されている。

2 見学日の授業

見学日（2009/04/18 Sat.）は、2009年度前期「金融論1」の第1回目であった。山口先生の「授業は初回が肝心」とのお話から、この日を見学日にさせていただいた。

3 授業スケジュール（出典：2009年度 シラバスより抜粋）

授業の目標

金融の仕組みや金融現象の解明を通して、現代経済の構造や動向を理解する。金融論1では、特に基礎的な制度や理論の理解を目標にする。

授業の内容

金融を理解するにあたって不可欠な「信用」という概念を取り上げた後、銀行制度に関する仕組みや理論を、最後には中央銀行の役割や金融政策について講義する。

成績評価方法・基準

学期末筆記試験の結果と出席状況（含：コメント）で評価。前者が8割だが、割合は試験結果や問題難度などで変化する。欠席回数4回以上はD評価。

テキスト

山口義行『誰のための金融再生か』（ちくま新書）、山口義行『経済再生は「現場」から始まる』（中公新書）。なお、書き込み式の講義ノートとして山口・川崎・飯島『金融論講義ノート』（三恵社）を使用。

参考文献

授業中に指示する。

授業計画

1. 銀行信用と信用創造 …………… 「おカネは日銀がつくるもの」という誤解
2. 信用による貨幣代位とその限界 …… 銀行はなぜ少ない現金準備でやっていけるのか
3. 預金形成の諸契機 …………… 企業はなぜ預金をもたざるをえないのか
4. 銀行借入の諸契機 …………… 企業が銀行借入をしたがる3つの理由
5. 銀行貸出と実体経済 …………… 銀行は単に「貨幣を供給する機関」ではない
6. 中央銀行の役割と金融政策 …… 「公定歩合の上げ下げ」こそ金融政策という誤解

4 対話



授業の工夫

授業運営について

- Q 非常に大人数にも関わらず、学生が私語もなく集中して聴いているのが印象的だった。どうしたら、このように授業に関心を持たせることができるのか？
- A 科目の意義を随所で伝えていくことが大事だろう。
他にも、キーワードを言う前には「今からすごい大事なことを言うから

ね」「メモしなさいよ」と必ず前置きをして注意を喚起したり、学生に手を挙げさせる時には、必ず全員何らかの形で挙げさせることで参加意識を持たせたり、全員が当事者意識を持つようにたとえ一人に対して話しかけるときでも、皆に聞こえるように話すようにしている。

本来、勉強は自分でするものであり、授業内で全部分からせるのは無理だと考えている。嫌いにさせないことが教員の仕事。「おもしろい」と思わせることができれば良い。授業の時間外にも勉強ができるように、本の情報を伝えるようにもしている。

Q 自分は必修科目を担当しているが、学生のモチベーションを維持することに苦労している。どうすれば学生のモチベーションを上げることができるのか？

A 自分は非常にワンマンにやっているが、選択科目ゆえに「私のポリシーに反するなら授業をとるのをやめて退出しなさい」と言うことができるという面がある。それらの積み重ねで、結果的に500人規模での大人数でも静かに授業ができていくという現実がある。

しかし、学生の受講態度はこれまで履修した授業の経験にもよるので、難しい部分があるだろう。

Q 特に1年次の場合、90分間緊張感を持続させるのが難しい。学生の緊張感はどうすれば持続させることができるのか？

A 例えば、自分は大人数の授業であっても、私語の注意をする時は「〇列目の右から〇番目に座っている赤い服を着た君」というように個人に向けて声を掛ける。学生に「教員は自分のことを見ている」という意識を持たせることが大事だ。しゃべる学生は教員の敵ではなく、聴こうとしている学生の敵なので、その繰り返しによって学生に「この授業だけはちゃんと聞こう」と思わせることができる。

授業では、どうやって「先生」として認めさせるかが勝負。教員は教卓に立てば自分は教員と認められていると思っているが、それは間違いだろう。

TAの役割

Q TA（ティーチング・アシスタント）は、授業の中でどのような役割を担っているのか？とても上手に活用されているので、ぜひ参考にさせていただきたい。

A 機器の操作は、原則としてTAに任せている。教員自身が操作すると、その間に学生の気が散ってしまうので、私は好きではない。

TAは2名。1人は大学院生で、同じ学生に複数年お願いしている。もう1人は学部生で、昨年「金融論1」を履修した学生。2人とも授業の内容と様子をよく分かっているので、事前に簡単な打ち合わせをするだけでリレーションがとれるので助かっている。





II 学生参加型講義のための 授業デザイン

早川 吉尚 教授（法学部）
原田 久 教授（法学部）

授業のプロフィール

授業名：国際ビジネス法総合2 @池袋キャンパス

- 履修者数：100人程度【中～大規模授業】
- 履修区分：法学部国際ビジネス法学科選択必修科目
履修者の傾向：法学部3、4年次の学生
- 授業形式：ゲストスピーカーを招いてのオムニバス形式

2009.10.21 Wed.

1 授業内容

本授業では、毎回、国内外の業務の第一線で活躍する実務家がゲストスピーカーとして招かれる。学生に各国の法制度とその背後にある法文化の違いを具体的に体感させることを目指している。

具体的には、人々のウェイ・オブ・シンキングの違いから起きてくるトラブルの事例から、その背後にある文化の違いを考えられる力を身につけることが重視されている。繰り返し、「なぜなんだろう」「どうしたんだろう」と考える思考パターン・考える力を磨くことが目的である。

学生の興味・関心を授業に反映させ、学生から積極的に質問・コメントが出されるような工夫がさまざまに施されており、学生参加型の授業をデザインするための多くの示唆が得られる。

2 授業見学日

見学日（2009/10/21 Wed.）のゲストは、中町昭人氏（アンダーソン・毛利・友常法律事務所）であった。日米両国で弁護士をされている経験をもとに、日米の弁護士の仕事内容や社会的位置づけの違い、具体的な事例を用いた現今の経済状況の紹介、日米の文化の違いなどを講義された。

3 授業スケジュール（出典：2009年度 シラバスより抜粋）

授業の目標

「リーガルマインド」「ビジネスセンス」「国際的な素養」の3つを兼ね備えたグローバル化するビジネス社会に対応可能な人材を育成する。

授業の内容

本講義は、「国際ビジネス法総合」と対をなすものである。日本企業が海外でビジネス展開した際に生ずるトラブルの解決や、あるビジネスモデルの海外での実現のための契約スキーム構築といった業務を日夜行っている実務家の方々を中心に、さまざまなゲストスピーカーに順に登壇してもらい、そうした問題が何故

生じるのか、その背後にある各国の法制度の差異はどのようなものなのか、さらにその背後にある各国の文化や社会の差異はどのようなものなのか、実例を通じて、米国編、欧州編、アジア編の大きく3つに分けて、各人に分かりやすく解説してもらうことになる。

各授業の後半は、学生との間における質疑応答に当てられる。講義への積極的な参加が期待される。

成績評価方法・基準

筆記試験50%、平常点50%。

テキスト

講義の中で適宜指示する。

授業計画

第1回	イントロダクション	第8回	欧州法文化論 3
第2回	米国法文化論 1	第9回	欧州法文化論 4
第3回	米国法文化論 2	第10回	アジア法文化論 1
第4回	米国法文化論 3	第11回	アジア法文化論 2
第5回	米国法文化論 4	第12回	アジア法文化論 3
第6回	欧州法文化論 1	第13回	アジア法文化論 4
第7回	欧州法文化論 2		

第1回以外は、すべて、ゲストスピーカーが担当専任教員とともに登壇する。

4 対話



授業の工夫

授業運営の方針

Q 初めて授業を担当することになったので、他の先生方がどのような方針で授業運営をしているかを知りたい。

A 私自身が心掛けているのは、次頁の6点。

① 開始時間の厳守

教員自身が遅刻をすると、必ず学生も遅刻をするようになってくる。例えば、教員が5分後に来るとなると、5分後が開始時間とみなされ、学生も遅刻してくるようになる。必ず時間ぴったりに始め、ちゃんと準備をして板書も済ませておき、「私はしっかり授業するつもりです」という態度を見せることで、学生の授業態度も自然と引き締まってくると感じている。

② 飲み物の持ち込み許可

私は飲み物を飲みながら授業を進めている。15年くらい前は、学生が授業中に飲み物を飲んでいて怒る先生がいたが、自分は喉が乾いたら声が出ないし、学生の集中力が途切れては意味がないので、飲み物は持ち込んでも構わないと言っている。

③ 休憩時間の導入

授業の間に5分間の休憩を必ず入れている。私自身、あまり人の話を長く聞くのは苦手なので、45分ぐらいになると集中力が途切れてしまう。5分ぐらいの休憩を入れてリフレッシュさせると、学生のほうも集中力が維持できるように感じる。

④ 双方向性授業の重視

必ず学生たちに当てながら授業をしている。授業の形態によって、かたちは違う。詳細は後述。

⑤ 学生の興味を高める題材の工夫

同じことを説明するのでも、より学生が食いついてくる、身近に感じる、あるいは、理解が深まるような、学生の興味を高める題材をいかに集め、それを逐次提供していけるかということが勝負だと思っている。

⑥ スーツの着用

普段は結構ラフな格好をしているが、授業には必ずスーツを着るようにしている。授業自体はフランクだが、パブリックな場なので、学生に対して、一本筋を通すことを心掛けている。

双方向性授業の重視

Q 「双方向性授業」とは具体的にどのようなことをしているのか？

A 私が担当している授業の中で、特に双方向性を重視している2つの授業

(「国際ビジネス法総合2」と「法学入門」)を例に紹介したい。

《「国際ビジネス法総合2」(履修者100名程度の3、4年次向け授業)》

1回の授業を前半と後半に分け、前半はゲストスピーカーの講義を聞きながら学生に質問カードを書かせ、休憩時間に回収し、その集計および選択をする。後半でその内容を読み上げてゲストスピーカーに答えてもらうというかたちを採用し、双方向性を実現している。

《「法学入門」(履修者250人程度の1年次向け授業)》

ワイヤレスマイクを学生に回しながら質問していくというのが基本的なスタイル。約250人の学生のうち、20~25人くらいは当てる。

知識は問わずに、選択肢を示して選ばせ、なぜそれを選んだかの理由を誘導しながら考えさせるようなかたちをとっている。

「分からない」は絶対に許さず、「答えるのが仕事だ」と言って、必ず何か答えさせる。そうすると、授業が遅滞してしまうこともあるが、失う部分よりも得る部分があるに多い。

ただ、どのような回答にも良いところを見つけ、エンカレッジする。学生が、話すこと自体によって悪い評価を与えられたり、恥をかいたりすることは絶対ないようにしている。

学生は、始めは皆面食らうが、徐々に慣れ、当たってもすぐしゃべるようになる。

双方向性授業の一番良いところは、学生の反応から理解度を探りつつ、必要に応じていろいろ変えられること。私は、基本的にパワーポイントを使わずに、全部板書でやっている。学生に質問して、ここのところは分かっていないなと思うと、表やイメージ図にしてみたり、別の角度から全体を整理してみたり、というようなことをやってから次に進む。パワーポイントではそれはできないので、できるだけ臨機応変に対応できるよう板書にしている。

Q 学生から出された意見はどのようにまとめるか？

A 例えばある事件を題材にし、「いったい何が原因でこういうことが起きたのだろうか」と聞いていく。すると、学生はいろいろなことを言うので、それらを黒板に抽象化してまとめて書いていく。図表にしていくと系統樹みたいなかたちになる。それを学生に理解させ、引き続き、「あなたの意見はこのパターンのこういうところに位置づいて、ここは問題だけど、ここは問題

ではないと思っているわけですね」と出された意見を全体の中に位置づけながら進めていく。

1つの事件というものは、さまざまな原因や問題が絡み合って起きるわけだが、それをひもとく作業をやらせている。

ある程度意見を聞いたら、「ここまで分析できた。最終的にはどれが本当なのだろうか」というところは分からないけれども、どれが本当かは「それぞれ考えてください」と言い、それで終わる。私はそれでいいと思っている。そうすると、特に1年生の最初のころは、「先生、答えを教えてください」と、血相を変えて飛んでくる学生がいる。受験の中で、常に物事には答えが用意されていると思っている高校生がどれだけ多いことか。

そのときには、あえて突っぱねる。「大事なことは、世の中のことにすべて答えがあることと自体が間違いで、いくつかの答えが、いくつかの立場によってあり得るということを理解できること。絶対的に何か正しいものがあるということは、少なくとも今の段階ではないよね」という話をする。学生は不安そうな顔をして帰っていくが、半年くらいすると、答えを知りたがる学生はずいぶん減る。

Q 学生とのやり取りを多くすると、授業進度に遅れが出たりしないか？ どうやって調節をしているのか？

A 教える内容をエッセンスと枝葉に区別し、進度に応じて枝葉の部分はばっさり切って、エッセンスだけをやるようにしている。枝葉もできればいいが、時間が押しているときには、枝葉のところはもう使わない。

最大限遅れても、ここだけは絶対教えずにちゃいけないうレイヤーと、その次のレイヤーとその次のレイヤーぐらいはつくっておき、そこでめりはりをつけている。遅れがちになった時は、第一レイヤーだけやって他の情報を提供せず、レスポンスがよくてぼんぼん回るという時は第二レイヤー、第三レイヤーのところを扱うようにしている。

学生の興味を高める題材の工夫

Q 「学生の興味を高める題材」とは、例えばどのような題材か？

A ≪「国際ビジネス法総合2」（履修者100名程度の3、4年次向け授業）≫

日本と外国との間の架け橋的な業務を第一線で行っている実務家をゲストスピーカーとし、グローバルそのものではなくて、法文化の違いがどこから出てくるのかということを中心に教えている。

ポイントは、どうしてそういう現象が起きるのだろうかということを、学生が自分から考えるようにさせること。最初から答えを与えるのではなく、できるだけ学生が自分たちで、その背後に実はこういうことがあるんじゃないかということを考えさせるようにしている。

そのためには、誰を呼ぶかといったアレンジが必要。必ずしも全員が話すことに慣れているわけではないので、タイムキープが必要になる。また、どうしても専門用語を使うことが多くなるが、人間は分からない専門用語が3つ出てくると集中力がなくなるものなので、その都度解説を加えている。

《「法学入門」(履修者250人程度の1年次向け授業)》

まだ法律を学んだことがない学生が対象なので、単なる法律知識の提供ではなく、法学に固有のものの考え方について、法律を使わないで学ばせるようにしている。

用いる題材は、例えば国語の入試問題。学生は、最近まで受験生だったので、必死になって書いてくる。その回答を集めてOHPで映し、学生に「これは8点満点で何点か」と聞き、別の学生にも聞いていく。すると、どういう要素があると何点で、字数制限を超えたらどうなのか、誤字があった場合はどう評価するのかといった基準を自分たちで作り出す。

これは法学で言うところの“要件化”。最初から「要件化は重要ですね」という話をすると10秒で済むが、それを1回、全員にこうした作業をさせることによって認識させている。

他にも、旬のニュースや題材における対立点、それらの背後にある利害関係について、法学的な考え方を使って分析させている。

学生は、自分がどう考えているか、教員がどう考えているかではなく、「ほかの人がどういうことを考えているのかを聞くのが面白い」という。そうすると耳を澄ますので、私語はなくなる。

私が弁護士としての経験を話すときも、例えば、覚醒剤に溺れてしまって、一度は助けただけれど、最後には8階から飛び下りてしまった人の話などをする。いろいろな話があるが、中でも学生にとって非常にシンパシーを感じるような題材を使って問題を出すと、全然食いつきが違う。

効果的な授業への導入方法

Q 学生に、1週間前の授業のことを思い出してもらうのに苦労している。学生を授業に集中させる効果的な始め方はないか？

A 私の場合、最初の約5分で全体の目次を提供し、前回、今回の授業範囲を冒頭で確認する。黒板の左側に線を引き、部分的に目次を書く。それで、今回、前回、次回を黄色と赤で色分けをして、全体の中で、今どの部分をやっているかを説明する。

どの授業でも、ウェブや初回の授業で、全体の目次を配るが、授業を進めていく過程で、どうしても学生の理解度などとの関係で、細目を改訂しなければならない場合がある。従って、その都度、黒板の目次が最新の目次だと伝えた上で5分くらいで内容を説明していき、「前はここまで、今回はここから」と授業に入っていく。

このやり方は、授業の要点が簡潔に提示できるため、学生からは試験勉強の参考になるとも言われている。

複数名による授業運営

試験問題の作成

Q 複数名の教員で授業を担当する場合、試験問題はどのように作成しているのか？

A 例えば9名の教員で担当している「国際ビジネス法総合1」という授業では、全体が契約締結編、法人設立編、紛争解決編の3つに分かれており、各編にそれぞれ3人ずつの担当者がある。問題は大問が3つなので、その3人のメンバーで1題ずつ作っている。

9人全体で作るのは無理だが、3つに分けて、3人で1つ作れという現実的にできるので、それに対応している。

ゲストスピーカー

Q 自分も授業にゲストスピーカーを招きたいと考えているが、事前にどのような準備をしておく必要があるか？

- A 可能な限りゲストスピーカーに事前に1回会って、授業の趣旨と形式を説明し、ご自身の具体的なエピソードみたいなものを聞き出している。そこでアウトラインを示していただき、「ここは専門的すぎるから、今回は弱めで」といった感じで内容を学生向けに調節することもある。

時間がとれないときでも、電話やEメールでアウトラインを交換し、事前に理解を図っておく。

TAの役割

- Q TAが2人いるようであったが、彼らはどのような役割を果たしているのか？

- A TAとプロジェクトコーディネーターの2名がサポートしてくれている。

コメントカードが最終的な平常点の評価対象になっており、その第一ドラフトをつくるのがプロジェクトコーディネーターの仕事。TAは一般の学生で、資料を配ったり回収したりという仕事をしてもらっている。

プロジェクトコーディネーターには、コメントカードを整理するとか、いいコメントカードを見つけ出すという作業をやらしてもらえればいいが、現在はまだ育てきれていない。そこができれば、私もすごく楽になると思う。

評価・成績について

- Q 学生が書いたコメントシートは、どのように評価しているのか？


- A 評価はA～Dでしている。遅刻をした場合は別の紙を渡し、たとえ内容がAでもB評価にする。

Dは、箸にも棒にもかからないという感じで、それ以外はA～C。Aはブリアントなもので、授業内で読み上げたものやそれと同等の場合はAをつける。B、Cをどう決めるかは、最初の段階はプロジェクトコーディネーターに任せている。

今までの経験からすると、授業が進むと、質問のコツや聞き方のポイントが分かってくるようで、A評価の学生が多くなる傾向がある。

評価は、各段階で何点と決まっており、その総計で機械的に平常点A～Dが決まり、テストの点数と組み合わせて最終的な評価を決めている。





Ⅲ 聴きたい授業を 自分で作る

豊田 由貴夫 教授（観光学部）

授業のプロフィール

授業名：東京リゾートの文化論 @新座キャンパス

- 履修者数：330人程度【大規模授業】
- 履修区分：全学共通カリキュラム 総合B
履修者の傾向：全学年にわたる。1年次生が多い。
- 授業形式：複数の教員、ゲストスピーカーによる
オムニバス形式

2009.10.23 Fri.

1 授業内容

本授業は、毎回コーディネーターや講師が東京ディズニーリゾートを題材にした話題提供を行い、その後、フロアーの学生を交えて活発な意見交換が行われている。

授業の構成

●先週の授業内容の復習：5～15分

- ・学生が書いたリアクションペーパーへのコメント



●話題提供：45～75分



●ディスカッション（質疑応答）：10～30分

- ・他の教員からの話題提供へのコメント



- ・フロアーの学生からの質問、意見、感想

2 授業見学日

見学日（2009/10/23 Fri.）のメインスピーカーは葛野浩昭教授で、第5回目（全13回授業）の授業であった。ディズニー映画の「ポカホンタス」を題材に、従来のディズニー映画における先住民族の描かれ方と先住民族が自ら作成した映画ではどのように自らの民族を描いているかの違いを解説された。

この話題提供に、まずはコーディネーターの豊田教授、続いて毛谷村教授がコメントをされた。コメントの際には、メインスピーカーの話題を聴きながらポイントをメモされた紙がスクリーンに映され、メインスピーカーとのやり取りが行われた。

その後、フロアーの学生からも質疑応答を募り、学生と教員の活発なディスカッションの場が生まれていた。

3 授業スケジュール (出典：2009年度 シラバスより抜粋)

授業の目標

東京ディズニーリゾートを文化人類学・社会学・観光学などさまざまな視点から分析することを試みる。受講者は講師からの刺激を受けて、独自の議論を展開してほしい。

授業の内容

東京ディズニーリゾート（以下、TDRと略）は成功したレジャー産業の例として経営学的観点から見られる場合が多いが、この授業ではむしろ文化現象としてTDRを考えてみたい。文化人類学の立場からは、アメリカのディズニーランドはアメリカ文化を確認する聖地であるとの見方があり、あるいはアメリカの文化帝国主義の例としてディズニー文化をとらえる見方もある。また、TDRはアメリカの本家以上に成功していることから、日本がディズニー文化をいかに受容したかを考えることもできる。この授業では、TDRに関するこのようなさまざまな視点を考慮に入れながら、文化現象としてのTDRを考えてほしい。

TDRのリピーターとなっている受講生も多いと予想されるが、TDRに関するさまざまな分析の有効性を、それぞれの経験から批判的に考えてほしい。実際の経験をもとにした、受講生による発表、また受講生同士の議論の機会も持ちたいと考えている。

成績評価方法・基準

授業への出席（30%）、レポート（70%）。

テキスト

特になし。

参考文献

授業時に指示する。

授業計画

1. イントロダクション	8. 東京ディズニーリゾートにおける観光行動
2. 東京ディズニーリゾートの観光資源	9. 東京ディズニーリゾートの経営学
3. アメリカにおけるディズニー文化	10. マクドナルド化、ディズニー化
4. ディズニーとジェンダー 1	11. 修学旅行と東京ディズニーリゾート
5. ディズニーとジェンダー 2	12. 東京ディズニーリゾートとグローバルイゼーション
6. ディズニーとサンタクロース	13. 受講者による研究発表
7. 東京ディズニーリゾートの空間論	

内容、順番は変更の可能性がある。

4 対 話

本授業と全学共通カリキュラム 総合Bの趣旨

Q どのような趣旨で授業をされているか？


A 全カリ総合Bの趣旨は、「複数の教員でやりましょう」ということと、それから「教員同士のディスカッションや意見交換・質疑応答を学生の前でしましょう」という授業のかたちだと私は理解しており、私もそのやり方に賛同しているので、それに従っている。

毎回いろいろな分野の方からお話していただくが、コーディネーターはいつもいることが期待されて、司会をして、その後、質疑応答の時間を割ととっている。そしてそれをフロアーの学生に示す。できれば学生からも質問を出してもらって、それに答えるというかたちにしようということで、本授業

も実施している。やはり全カリの総合Bで前期は「睡眠の文化を考える」を、以前には「社会調査法の基礎」という授業を行った。これらの授業もいろいろな分野の方に来ていただいてお話していただいたが、私自身が他の分野の方法論や調査法等の話を聞きたいというのがあった。「聴きたい授業を自分で作る」というのはそういう意味だ。学生にもそういう分野の入門的な知識を得てもらいたいと考えている。

Q 全カリ総合Bは、自由にテーマを決めることができるか？

A これはいろいろな部署からの申請で「こういうのをやりたい」と言っ出て、それを認められるかということ。だいたい今だと、「学部から1つぐらい出しましよう」とか、「研究所から出しましよう」とか、いろいろあって、それで毎年20ぐらいになっているはず。

 寺崎昌男・絹川正吉監修、立教大学全カリの記録編集委員会編集、2001、『立教大学「全カリ」のすべてーリベラル・アーツの再構築ー（シリーズ教養教育改革ドキュメント1）』東信堂。

複数の教員による授業運営

シラバスの作成方法

Q 後期授業のシラバスは、前年の12月に出るが、複数名の教員による授業ではどのように作成するのか？

A かなり早めに行うが、翌年になると変わってくる。最初に出すシラバスはやはり予定なので、「変更の可能性ある」と明記している。

Q シラバスの授業計画欄にあるようなスケジュールは、基本的には12月ぐらいまでにコーディネーターの教員が作成するのか？ それとも何人がで作成するのか？

A 複数で作る場合もあるが、やはりコーディネートして統一するのは1人（コーディネーターの教員）で行っている。

授業方針

- Q 「授業で誰を講師として呼ぶか」という方針は、前からある程度は決めているか？
- A 昨年もこの授業を行っており、今年は2年目なので、昨年が参考になっている。私（コーディネーター）が「こういう授業をやりませんか」と言って呼び掛け、中心になっていただいた教員と話して「ああいう人も呼べる」「こういう人に話してもらえないか」という話をして、最終的には私（コーディネーター）が決定した。

授業準備の流れ

- Q 具体的な授業準備はどのような流れで行われるか？
- A 全かりは提出書類が結構あって、それに従っていくと、自然に決まる。ちょうど今ごろ（10月ごろ）が来期の兼任（非常勤）の教員やゲストスピーカー等を出すというのがあり、提出しなければならない。そうすると、全体の構成とメンバー構成を考えることになり、後で変更も可と考えている。

オムニバス形式の授業における注意点

- Q オムニバス形式の授業の注意点は何か？
- A オムニバス形式の授業においては、教員（講師）が自分の回の時だけ来て、自分のテーマを話すというのは、学生の側から見ると、毎回違う話をただつながって聞いているということになると思う。そのため、コーディネーターが話の連続性を保ち、授業全体の中での今回の授業の位置づけを明確化する方が、学生には分かりやすいし、面白いのではないかと思っている。
- Q 各授業の話題は、どのように決めるのか？
- A 基本的には「こういうテーマでやってください」ということを伝え、各授業の担当講師にだいたい考えていただいている。授業直前に、最近の状況を踏まえて変更するというのは多分出てくる。それは各回の講師に任せている。

ゲストスピーカーについて

Q ゲストスピーカーはどのような所から呼んでいるのか？

A 今年は基本的には、学部（観光学部）内に授業をしてもらう教員が何人かいる。去年は他学部から1名、学外から1名、それに加えてオリエンタルランドの方に1回来ていただいた（最終的には今年度も来ていただいた）。

Q ゲストスピーカーに講義を依頼する時の注意点は何か？

A ゲストスピーカーも兼任講師もそうだが、「任せますから」と依頼することは結構あるが、授業をコーディネートする側から見ると、「こうこうこうという話でこういう内容をこのように出してください」とかなり指定した方が、授業の中では学生に対しても分かりやすいのではと思っている。「何でもいいですから」と依頼してしまうと、ずれた話になる場合があるので気を付けている。

授業内ディスカッション

Q ディスカッション時の1グループ当たりの学生数は？

A 今回のような大規模授業でもグループディスカッションをやってもらうことがある。しかし、以下の話は基本的には20~30人の授業（演習）を前提としている。ディスカッションをしてもらう際には、5、6人で多くても6、7人のグループを作ってもらおう。「人前で意見を言うのは苦手だ」という学生もいるので、最初は意見が言いやすいように、とりあえず5、6人の少人数にして全員意見を出すようにするということを目的としている。そうすると、苦手な学生も少し発言するようになるので、それを繰り返して慣れてもらうようにしている。

Q 授業内のディスカッションで心掛けていることは？

A 大人数の授業であっても、学生の意見ができるだけ多く出るようにと考え、工夫している（下記参照）。

★ディスカッションでの意見のさせ方 7つのポイント★

① 最初に「後で質問しますよ」「聞きますから」と言っておく（学生にいき

なりマイクを向けても意見が出ないため)。

- ② 面識のある学生がいて、その学生から意見が出るのが期待できるような場合、その学生から、まず発言してもらおう。
- ③ 学生から出た意見を、こちらで一般的な表現に直してみんなに伝える。
- ④ 出た意見は、原則としてけなさない。できれば褒める。褒めることによって意見が出やすいようにする。
- ⑤ テーマを身近な話題にすることで考えてもらい、意見が出やすいようにする。
- ⑥ 問い掛けてからすぐに意見が出なくても少し待つ（すぐに言っても出ないことがあるので）。
- ⑦ 意見を言いそうな学生の見当をつけて聞いてみる。例えば「意見を言ってみようかな」と思っている学生は顔を上げていることが多いので、その学生に意見を聞いてみる。

Q 大教室の場合には、どの学生が発表するか、発表者が出てくるのかという問題があるが、その対応法は？

A 例えば1つの方法として、授業に自分のゼミの学生がいる場合は、その学生が意見を言うことが期待できるので、その学生に答えてもらうということがある。

Q ディスカッション時の進行の注意点は？

A 注意点は、およそ以下の3点。

- ① 時間を決めて議論する。
- ② できるだけ全員が意見を言えるように、1人だけがずっと意見を言っていることがないように注意しておく。
- ③ 必要ならば司会を決める。

だいたい司会は決まらないのが普通なので、時間を決めて「最後に発表してもらいますからね」とあらかじめ言っておいて、「あと5分です」とか後で言うと、「そろそろまとめようか」という話をしてくれる。それで「何グループかは発表してもらいます」とすると、司会が議論をまとめるようになる。

最初から「今日は議論をしますよ」と言っておいて、ディスカッションの前に話題を提供して「こういう問題がありますね」というところまでやっておけば、議論になる。

話しっぱなしにならないグループディスカッションの仕方とは？

Q 授業中のディスカッションをさらに一歩進んで実施するとき、学生が言いっぱなし、話しっぱなしにならないグループディスカッションは、時間をあまりかけないでできるか？

A ディスカッションの目的による。目的が、他の人の意見を聞いて自分とは違う意見がいろいろあるということを知るためであると、おそらく発表までしなくていい。その場合は、議論をする場を持つことに意味がある。学生が話しっぱなしにならないためには、以下の3点に留意すると良いのではないかと思う。

★ディスカッションにおける議論の進め方 3ステップ★

- ① 最初のうちは、自分と違う意見を持っている人がいろいろいると教えるだけでもいいと思っている。
- ② ゼミでやるなら、その後自分の意見を出せるとか、ほかの人の意見に対して反論することなどを身に付けてもらう。
- ③ もう少しすると、意見をまとめるとか、司会をするとか、それから議論を深めるとかいうのを身に付けるのを一応目標にする。しかし、なかなかそこまで全体でいくかというのは難しい。

Q フロアーの学生から質問・意見を募り、教員3名とディスカッションする場面があったが、教員同士であの場面に関して、事前に打ち合わせをされているのか？

A 特に打ち合わせはしていない。その場でアドリブで話しているが、議論になっている。多少意識して、教員同士が互いに立場を対立させて議論するようにしている。その方が学生に分かりやすいと思うので。



授業の工夫

授業の照準の合わせ方

Q 履修者が全学年にわたる場合、話す内容をどのように調整しているか？

A 基本的な概念の説明の際でも、1年生にはやはり理解しづらいため、最初に少し説明をする。しかし、1年生に合わせると、2・3年生は退屈するか

もしれないので、そこからもう少し発展させる。

教員が自分自身で「学生にこういうのを考えてほしい」あるいは「こういう授業を理解してほしい」ということを話すよりも、一段階下げてもう少し簡単にした方が、学生にとっては分かりやすいようだと考えている。

Q リアクションペーパーの活用法は？

A 授業の最初の部分は、前回のリアクションペーパーの内容を読んで話しながら、前回の授業内容を確認するという、“ディスクジョッキー型”にしている。そうすると、学生の理解の確認をして進めることが可能なので、理解しやすいと思っている。

Q 授業内容にあまり興味のない学生を引きつけるには？

A 例えば、学生へのレスポンスとして、リアクションペーパーの現物をOHP（OHC）で見せている。そうすると、プロジェクターに映った時、リアクションペーパーに線が引いてあるのが分かると、学生も「ああ、先生は読んでくれているんだ」と思うことがある。その辺で多少惹きつけられるのでは。

評価・成績について

評価における教員の分担

Q 評価はどのようにしているか？

A 評価は、出席30%+レポート70%。レポートでの評価は大変だが、このような形式の授業をする材料にと多少考えているので、何か面白いレポートがあればと思って読むことにしている。

Q レポートの評価は、教員で分担してレポートを読むのか？

A 原則、私（コーディネーター）が全部読み、評価する。

レポートの分量・テーマ設定の仕方

Q レポートは何回実施でどれぐらいの分量か？

A 授業の最後に1回。文字数は3,000~4,000字前後。

Q レポートのテーマはどのようなものか？

A 1つはディズニーに関するテーマを自分で探して、それについて調べたものをレポートするというのもいいとしている。またもう1つは、最初の授業でレポートのテーマの候補をいくつか挙げて「こういうテーマでもいいですよ」と言って説明している。

さらに、今年は、いい評価だったレポートを2、3選んで、こういうレポートがいいということで配布しようと考えている。特に1年生は恐らく、レポートに何をどう書いたらいいかわからないまま出している。大学のほうも、レポートとはどういうものなのかを教えないまま「レポートを出しなさい、出しなさい」と言っている。採点も、成績は出るが何が悪いかわからないままやっている（これは学部でやらなければいけないのだが）。そのため、具体例を示すことで、どういうものかいいレポートかわかっていると、いくらかの基準になるのではと考えている。

学生が書いたレポートの著作権について

Q いいレポートを見本として学生に配布するということだが、その際レポートを書してくれた学生には、あらかじめ断るのか？

A もちろん断って配布する。レポート提出時に「レポートを今後の授業などで使う時があるので、使われるのが嫌な人は事前に言ってください」と伝える。配布する時は、名前を伏せて配る。

レポートでの^{ひょうせつ}剽窃の禁止の注意の仕方

Q 現在学生のレポートにコピペ（コピー&ペースト）がすごく多いのだが、これに対して何か対策を取っているか？

A 本授業のレポートは、テーマがテーマなので「ネットからデータを取ってきてもいいですよ」と言っている。Webを引用で使ってもいいから、どこから引用したか、URLをきちんと書くように言っている。必ず文献を複数利用するようにと指定することもある。

また、データ元から文章をそのまま写すようなレポート内容だと「高い評価が出ませんよ」と伝えてある。それから、「私（教員）は参考になる文献

やURLはたくさん見ているから、(剽窃は) すぐ分かりますよ」と言って防止している。

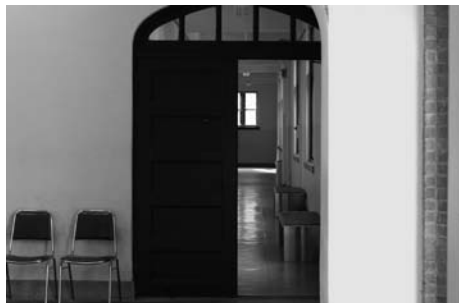
授業で使用する映像の著作権

Q 授業で映像を使用する場合、著作権問題については、どこを見れば分かるか？ 使用しても大丈夫か？

A 授業に関する著作権の問題については、大学で配布されたパンフレット(※)があるのでそちらを参照すると分かると思う。

著作権について詳しくはこちら

- ・文化庁 著作権 <http://www.bunka.go.jp/chosakuken/index.html>
- ※・独立行政法人 メディア教育開発センター、2007、「ICT活用教育と著作権 関係者が知っておくべきこと—著作権法一部改正(平成18年12月) 対応—」
- ・社団法人 著作権情報センター <http://www.cric.or.jp/>
- ・楽しく学ぼう著作権 <http://www.kidscric.com/>



IV 小さな成長を 毎回体験させる

小澤 康裕 准教授（経済学部）

授業のプロフィール

授業名：仕事と会社について考える @池袋キャンパス

- ☑ 履修者数：30人程度【小～中規模授業】
- ☑ 履修区分：全学共通カリキュラム <立教生の学び方>
履修者の傾向：複数学年、複数学部にわたる学生
- ☑ 授業形式：ディベート、プレゼンテーション、講義

2010.01.13 Wed.

1 授業内容

履修者数30名の比較的小規模なクラスサイズで、学生同士が議論を重ね、自ら学び、自ら意見を発信する機会を多く提供している。

2 授業見学日

見学日（2010/01/13 Wed.）は、今学期最後の授業で、学生を3～4人の小グループに分け、「仕事」や「会社」を題材にディベートが行われた。

3 授業スケジュール（出典：2009年度 シラバスより抜粋）

授業の目標

仕事や会社について学ぶことを通じて、調査、分析、プレゼンテーション、ディスカッションなどの能力を身につける。

授業の内容

世の中には様々な仕事があり、様々な会社があるが、多くの人にとっては、ひとつの会社でいくつかの職種を経験しただけで一生を終えることが普通だった。しかし、今はそういう時代ではない。だからこそ、広い視野をもち、世の中に目を向けて、将来の自分の「仕事」や「会社」について学生のうちにしっかり考える必要がある。

そのためのきっかけを与え、「仕事」や「会社」を題材にした調査、分析、プレゼンテーション、ディスカッションを楽しみながら体験してもらう授業を行う予定である。

成績評価方法・基準

出席（30%）、討論への参加（30%）、プレゼンテーション（30%）、レポート（10%）などによって総合的に評価する。ただし、4回以上欠席したものはD評価とする。

テキスト

特に指定しない。

授業計画

説明力、思考力、表現力、コミュニケーション力、想像力を鍛えるため、以下の各項目を行う計画である。

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1. オリエンテーション
(自己紹介を含む) | 4. 日本経済新聞の読み方 |
| 2. スタディ・スキルズ | 5. プレゼンテーションの
方法と実践 |
| 3. 会社とは | 6. ディベートの方法と実践 |

4 対話



授業の工夫

授業の目的

Q この授業ではどのようなことを目指しているか？

A 全カリで展開されている「立教生の学び方」という科目全体の目標と、自分が担当している授業での個人的な目標の2種類がある。

前者は全カリという特徴を生かし、学問的背景や年齢の異なる履修者がお互いに議論する場を提供すること、調べる・読む・考える・書く・発表する能力を養うということ。これを達成するために、主にプレゼンテーションとディベートを学生に数多く経験させることが中心に計画されている。

後者は、授業をきっかけに学生同士が相互に結びつき、楽しみながら学ぶ場を提供すること。こういう能力を上げようとか、こういうことを身に付けてほしいというよりも、とにかく楽しんで勉強をしてもらおう、学んでもらおうということを主眼に考えている。

学生の積極的な参加の促進


Q どうすれば学生の積極的な参加を促すことができるか？

A プレゼンテーションとディベートを取り入れているので、学生は自分がプレゼンテーションを担当していたり、自分のチームがディベートで対戦したりする時は必ずしっかり準備をして出席する。

発表者でない学生も、ただその場において聞くだけにならないように、発表をしない学生全員が発表者を評価するようにしている。

具体的には、「相互評価シート」を作り、5段階評価に加え、感想も書いてもらう。書かれた感想は、発表した学生ごとに私がまとめて入力し直し、次の授業時に発表者を含む全員にフィードバックしている。ゼミなどは、基本的に同じような関心を持つ学生たちが集まっているので、こういうことを積極的にやらなくても、自然にうまくいく部分があると思う。それに比べると、全カリは学年も学部学科もバラバラなので、できるだけきめ細かく対応するようにしている。

なお、その評価結果は学期末の成績評価の一部として反映させており、学生が仲間の成績を自分たちでつけるというシステムになっている。

 グエル・川口忠信、2006、『あしたはプレゼン—プレゼン庶民のための—』ローカス。

Q 学生同士のコミュニケーションを促すにはどのような方法があるか？

A 学生同士の懇親会を開催するのも1つの方法ではないか。もちろん、未成年者にはお酒は出さないが。私の場合、前年度の受講生にも声を掛けて、交流の機会を持てるようにした。そうすると、「去年はこうだった」という話をしてもらうことで授業の様子を伝えることもでき、学生同士が仲良くなり、その後も一緒に頑張っていくってくれる。

ディベート

Q ディベートを授業に取り入れたいと考えているが、具体的にどうすればよいのかで悩んでいる。今回の授業ではどのように指導してきたか？

A 授業の初めに進め方について説明をした。その際、ディベートに関するビデオを鑑賞し、実際のディベートの様子を見せている。それを見た上で、2週間前からテーマ等のアナウンスをし、早めに準備ができるようにした。

初めのうちは、会社や社会のような難しい話題より、学生にとって身近な携帯電話の話や、小学生に英語を教えるべきかどうか、といったところから始めている。

ジャッジも学生にやってもらっている。ジャッジの人には「ディベート評価用紙」および「ディベート記録用紙」を渡し、メモを取りながらディベートを聞いてもらって、最終的に点数をつけ、どちらが勝ったかを判断してもらっている。

学生同士でそれぞれの良いところを盗みあい、お互いのプレゼン能力やディベート能力を上げてもらおうと思っているので、私はあえてあまり口出しをしないようにしている。

また、トーナメント戦でゲーム性を持たせることで、楽しみながらやってもらうことを意図している。

Q 学生の学年や学部が違う場合、ディベートのテーマを設定するのが難しいのではないか。どのようなものを採用しているか？

A テーマ設定は非常に難しい。厳密にディベートをやろうとすると、今回の授業で設定した12のテーマ（例「日本では、今後、消費税率を引き上げなければならない」「今後、日本企業及びその従業員にとっては、年功序列型賃金制よりも能力主義型賃金制を重視した賃金制の方がよい」など）の中にはうまくいかないものもある。あまり厳密にやろうとしてもテーマがなくなってしまうため、それは仕方がないと思って割り切っている。

また、学生の中には、採用したようなテーマが世の中で議論されていることすら知らない人も多い。新聞で騒がれていることや、既に議論されていて結論が出ていると考えられることでも、あえて議論してみて、多くの学生にその内容を知って、共有してもらいたいと思って設定している。

テーマは2週間以上前には発表し、その時点で質問を受けることはある。そこで学生の質問に対応して少しテーマを調整をすることもあるが、厳密に言葉の定義はしていない。例えば、能力主義と成果主義にしても、実際に完全に成果に連動した賃金制と、完全に年齢に連動した賃金制が世の中に存在

するわけではない。したがって、どちらを重視するかぐらいで、ゆるく考えて議論をするよう指示をした。あまりリジッドにやろうとしてもテーマがなかなかないので、議論が成り立つかどうかという視点で考えて、テーマ設定をしている。


Q ディベートを授業に取り入れると、どうしてもディベートの方法の指導に力を入れてしまい、内容面の指導が十分にできない。どちらに力点を置くべきか？

A ディベートというのは言うなれば言語ゲームであり、お互いに自分の所信とは別に論理を組み立てて主張を展開していく。ここに「ディベートの方法」や「技術」が必要になる。一方でそれを構成していくためにはある種の研究や勉強、つまり内容を充実させておくことが必要だという面を持っている。

今回の授業では、プレゼンテーションの機会を全員に多く与えるということを重視しているため、このようなテーマ設定がされており、内容面の指導は特にしていない。これが、例えば専門科目として実施されるのであれば、専門の内容を使って証明していくことになるので、今回の授業とは指導の力点が変わる。科目の性質に応じて判断をする必要があるだろう。

Q 他の参加者（教員）の皆さんは、学生に意欲的にディベートに取り組んでもらうために、どのような工夫をしているか？

A 私も、授業内でディベートや問題解決プロジェクトを取り入れているが、勝ったチームに少しだけ点数をあげている。あまり大きくなると良くないと思うが、そうすると、チーム全員が頑張るモチベーションになる。サボる学生をなくすためにも、チーム全体に軽いプレッシャーを与えるのは効果がある。その際には、学期の最初からそのことを学生に伝えておくということが、大事。

 松本茂・河野哲也、2007、『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』玉川大学出版部。

毎回学生に成長を実感させるためには

Q 自分の成長を実感すると、学生は意欲的に学ぶのではないかと考えている。どうすれば学生に自分の成長を実感させることができるか、何か良い方法はないだろうか？

A 毎回授業終了時に、学生に「大福帳」(p.43)というシートにコメントや感想を書いてもらっている。これは他の大学の先生が使っていたのを真似して始めた。毎回学生に簡単にコメントや感想を書いてもらい、それに対して毎回私がコメントを加え、次の授業が始まる時に全員に返している。コメントには、否定的なことは書かず受容的な表現を使い、そこにアドバイスを加えるというようにしている。大福帳は、皆の前で発言をしづらい学生が質問を書く場としても機能している。

 参考資料：大福帳 (p.43参照)

織田揮準、1991、「大福帳による授業改善の試み」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)別冊』v.42、pp.167-169。

織田揮準、2006、「形成的評価手法(大福帳)を用いた授業改善研究」『皇學館大学文学部紀要』v.44、pp.300-324。

Q ゼミの場合はどういう方法があるだろうか？

A 2年の最初の回に、自己紹介を兼ねて何に関心を持っているかを紹介させている。その後も節目節目に卒論でやりたいことを発表させ、徐々にいわゆる研究に関するプレゼンテーションをやらせている。それらの資料を全部、一人一人について背表紙をつけて、個人カルテにして持っている。

そうすると、例えば3年の終わりや4年の初めになって卒論の相談に来たとき、カルテを見せながら「君は2回目の報告でこうやって、3回目の報告ではこうでしたね」というと、はっきり自分の成長の階段というのはよく見えるようだ。そういったカルテを作るのも良いのではないか。

ただ、これは1学年最大で20人程度のゼミだからできることで、それ以上の大きな規模の授業だと、完全に個人別にファイルを作り、全部保管しておくのは難しい。

10年後に実感できる成長

Q 小さな成長を毎回体験できれば、学生が意欲を持つことは間違いない。他方で、1年後、10年後にならないと有効性が実感できない科目もあるのではないか。

A もちろんある。教員同士が、「この科目は毎週成長がわかるようにデザインすべきもの、こちらの科目は10年後」ということを教員同士で確認し合い、全体の関係を考えることが必要なのではないか。

学生は、卒業までのカリキュラムに沿って科目を履修している。したがって、それぞれの科目がカリキュラムの総体のなかでどういう意味を持つかということ、どれだけ上手に学生に対して説明できるかというところは非常に大きい。この科目はどのような科目なのかということ、やはり二重三重にいろいろな機会に学生に自覚させ、授業を履修させる必要がある。

評価・成績について

Q 最終評価はどうしているか？

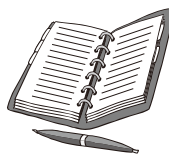
A まず、好きな会社についてのプレゼンテーションは、学生に相互評価で点数を細かくつけてもらうので、それらを全部Excelで合計し、相対的に上から下まで点数を出す。学生同士で行った相互評価の結果も、学生との約束どおり、成績に反映させている。

ある文章を要約する課題なども出しているので、それらの評価も加えて全て合計し、それぞれの学生の点数を出す。比較的AやSになる学生が多くはなるが、もちろんBやCも出るようになっている。

Q 学生が適切な相互評価をすることは可能なのか？

A 学生の相互評価を採用すると、20人程度の規模までいくと、教師とあまり変わらない評価が出てくるなという実感がある。日常的な経験から、数人だとややブレが大きくなるが、20人程度になれば、妥当な相互評価は可能だと感じている。

☞ 参考資料：大福帳



2009年度（後期）大福帳

担当：小澤	講義名:立教生の学び方	水曜3時限
学籍番号：		ふりがな 氏名：
月/日	感想、言いたいこと、聞きたいこと、あなたからの伝言	あなたへの伝言
No.1 /	_____ _____ _____ _____	
No.2 /	_____ _____ _____ _____	
No.3 /	_____ _____ _____ _____	

※織田揮準、2006、「形成的評価手法「大福帳」を用いた授業改善研究」
皇学館大学文学部紀要44、p.300の大福帳を小澤がアレンジしたもの。



ひがのみきなり
日向野 幹也（経営学部BLP主査・教授）

参加したワークショップ

「何百人の学生に対しても、“一人”に向けて話すべし」

（経済学部 山口義行教授担当）

「小さな成長を毎回体験させる」

（経済学部 小澤康裕准教授担当）

上記2つのワークショップに参加しました。山口先生の授業は、9号館大教室にほぼ満席という教員にとっては過酷な環境で、私語をさせず授業に集中させるにはどうしたらよいかについて重要なヒントをいただいた気がします。「一人に向けて話すべし」とは「静かにしなさい」と注意する時にこそ当てはまるようです。教室全体に向かって漫然と「静かにしなさい」と言っても短時間しか効き目がなく、大勢が私語していてもその中から一人を選んでその学生一人に私語をやるように厳しく注意して、周囲の学生たちに「次は自分か」と思わせることが重要なようです。その意味ではどの学生と「対決」するかというところの選択と、いったん「対決」し始めたら引かない決意も必要とされそうです。このあたりは経験を積むとできるようになるのでしょうか。

小澤先生の授業は、わたしども経営学部の授業でもディベートをとりあげているので大変興味をもって見学に伺いました。プレゼンテーション練習の要素とディベートの立論作成の要素とをうまく組み合わせて学生の参加意欲をうまく引き出していらっしゃるようにお見受けしました。立教の学生は雰囲気流されることがことさらに多いように思えますので、ディベートの練習は大変意義のあることと思います。論理の重要性を体得させるためには、プレゼンテーション練習の要素とディベートとを（同じ授業の中で並行して扱うにしても）何かの方法で分離できるとさらに効果的かもしれません。

このような授業見学とワークショップの機会は大変意義のあることと思います。私ども経営学部BLP（ビジネス・リーダーシップ・プログラム）の授業（BL 1、2、3、4）でも授業視察・見学を歓迎していますので、ご興味をお持ちの方はご連絡ください。

✉ mhigano@rikkyo.ac.jp



しみず きぬよ
清水 絹代 (ランゲージ・センター (英語担当) 教育講師)

参加したワークショップ

- 「何百人の学生に対しても、“一人”に向けて話すべし」
(経済学部 山口義行教授担当)
 - 「学生参加型講義のための授業デザイン」
(法学部 早川吉尚教授・原田久教授担当)
 - 「小さな成長を毎回体験させる」(経済学部 小澤康裕准教授担当)
-

4回の授業見学会のうち、3回に参加させていただきました。他の先生方のご講義に出席させていただく機会は普段ほとんどありませんので、大変有意義な時間でした。下に3人の先生方から学んだことを書かせていただきます。

経済学部、山口義行教授の「金融論1」は同じ時間に担当講義がありました関係で、意見交換会のみ参加でした。山口教授は他大学で、経済学を専攻としない学生の方々が対象の「金融論」を10年ほどご担当されたとのことでした。その10年の経験が重要であったと伺いました。日々の、継続的な努力が大切であることを改めて感じました。

法学部、早川吉尚教授・原田久教授の「国際ビジネス法総合2」では、ゲスト・スピーカーのご講演に積極的に関わることで、現場と理論の橋渡しが可能となることを学びました。このような講義を行うためには、ゲスト・スピーカーとの十分な事前打ち合わせ、信頼関係づくり、授業カリキュラム全体を熟知することが必須であると思いました。

経済学部、小澤康裕准教授の「立教生の学び方〈仕事と会社について考える〉」では、学生同士で行うディベートに全員が聴き入り、真剣にメモを取っていました。小澤准教授は、学生が「大福帳」に書くコメントに対して、毎週赤ペンで返答されていたりしました。ディベートが知的に面白いだけでなく、小澤教授がお書きになるメッセージがあって、あのような雰囲気生まれるのだと思いました。

どの見学会も大変勉強になりました。先生方から学んだエッセンスを取り入れつつ、講義の充実を図りたいと考えております。講義を公開してくださった先生方、コーディネーターとして授業見学会の実現にご尽力くださった皆様に感謝申し上げます。





参考文献・ブックガイド

◆授業改善・授業研究

- 赤堀侃司、1997、『ケースブック大学授業の技法』有斐閣。
- プリンクリ、A.、デッサンツ、B.、フラム、M.、フレミング、C.、フォースイ、C.、ロスチャイルド、E. (小原芳明監訳)、2005、『シカゴ大学 教授法ハンドブック (高等教育シリーズ131)』玉川大学出版部。
- デイビス、B. G.、ウッド、R.、ウイilson、L. (香取草之助監訳)、1995、『授業をどうする!カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』東海大学出版会。
- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹、2001、『成長するティップス先生 (高等教育シリーズ104)』玉川大学出版部。
- Johnson, D. W. , Johnson, R. and Smith, Karl, 2006, *Active Learning: Cooperation in the College Classroom*, Interaction Book Company
- 片岡徳雄・喜多村和之編、1989、『大学授業の研究』玉川大学出版部。
- 京都大学高等教育教授システム開発センター編、2001、『大学授業のフィールドワーク (高等教育シリーズ103)』玉川大学出版部。
- ロンドン大学教育研究所大学教授法研究部 (喜多村和之他編訳)、1982、『大学教授法入門』玉川大学出版部。
- 織田揮準、1991、「大福帳による授業改善の試み」『三重大学教育学部研究紀要 (教育科学) 別冊』 v.42, pp.167-169。
- 織田揮準、2006、「形成的評価手法 (大福帳) を用いた授業改善研究」『皇學館大学文学部紀要』 v.44, pp.300-324。
- 立教大学 大学教育開発・支援センター編、2006、『「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブックー学生の積極的な学習を励ますためにー (大学教育開発研究シリーズ No.2)』。
- 立教大学 大学教育開発・支援センター、2009、『バージニア工科大学視察報告 米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ (大学教育開発研究シリーズNo.8)』。
- Silberman, Mel, 1996, *Active Learning: 101 Strategies to Teach Any Subject*, Allyn & Bacon.
- 土持ゲーリー法一、2007、『ティーチング・ポートフォリオ』東信堂。
- 山口義行、2008、『聞かせる技術』河出書房新社。



参考文献・ブックガイド

◆大学論・大学教員論

Bain, Ken, 2004, *What The Best College Teachers Do*, Harvard University Press (=2008、高橋靖直訳、『ベストプロフェッサー』玉川大学出版部)。

ボイヤー, E. L. (有本章訳)、1996、『大学教授職の使命—スカラーシップ再考』玉川大学出版部。

名古屋大学高等教育研究センター、2005、『ティップス先生からの7つの提案〈大学編〉』。

寺崎昌男・絹川正吉監修、立教大学全カリの記録編集委員会編集、2001、『立教大学「全カリ」のすべて—リベラル・アーツの再構築—(シリーズ教養教育改革ドキュメント1)』東信堂。

◆学生向け

近田政博、2009、『学びのティップス』玉川大学出版部。

グエル・川口忠信、2006、『あしたはプレゼン—プレゼン庶民のための—』ローカス。

松本茂・河野哲也、2007、『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』玉川大学出版部。

世界思想社編、2008、『大学生学びのハンドブック』世界思想社。

●立教大学 大学教育開発・支援センター 大学教育開発研究シリーズ



No.1 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請—, 2006



No.2 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を促すために—, 2006



No.3 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学—, 2007



No.4 わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学び力、選ぶ力とカリキュラム—, 2007



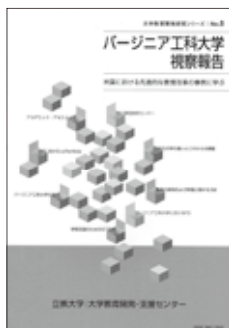
No.5 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道—, 2007



No.6 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて—, 2008



No.7 立教大学の今後と中教審の審議
— 学士課程教育の再検討と将来を
考える —, 2009



No.8 バージニア工科大学視察報告
— 米国における先進的な教育改革の
事例に学ぶ —, 2009

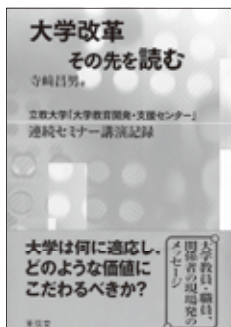


No.9 立教大学における
学習支援と図書館, 2009



No.10 立教大学における
アドミッション・ポリシー, 2010

●立教大学「大学教育開発・支援センター」連続セミナー講演記録



寺崎昌男
『大学改革 その先を読む』, 2007
東信堂, ¥1,300

授業担当者

- 第1回 山口 義行 (経済学部教授)
第2回 早川 吉尚 (法学部教授)
原田 久 (法学部教授)
第3回 豊田 由貴夫 (観光学部教授)
第4回 小澤 康裕 (経済学部准教授)

2009年度FDワーキンググループ (大学教育開発・支援センター)

- 佐藤 文広 (センター長、理学部長)
野呂 芳明 (センター員、社会学部教授)
小澤 康裕 (センター員、経済学部准教授)
八木 美保子 (センター学術調査員)
山本 裕子 (センター学術調査員)
寺崎 昌男 (センター顧問、立教学院本部調査役)
今田 晶子 (センター課長)

大学教育開発研究シリーズ No.11 アクティブな学びをデザインする

— 4つの授業をめぐる対話 —

2010年4月発行

編集 山本 裕子・八木 美保子

発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615
<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>
e-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印 刷

株式会社 ナナオ企画
〒104-0043 東京都中央区湊1-6-11
TEL : 03-3297-2805 FAX : 03-3297-2807



RIKKYO UNIVERSITY

